JIC インフォメーション

第 185 号 2015 年 10 月 10 日
年 4 回 1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所：JIC 国際親善交流センター　発行責任者：伏田昌義　http://www.jic-web.co.jp
東京オフィス：〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F　TEL：03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪・ロシア留学デスク：〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号　TEL：06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ

ロシア・旧ソ連 国際交流誌

キジー島の木造教会建築
プレオブラジェンスカヤ教会
（世界文化遺産）

《特集》 ロシアの世界文化遺産
キジー島、古都ノヴゴロド、カザン・クレムリン･･･2P
《旅行記》アバチャ火山 登山記･･白井秀治･･･････6P
ロシアからモンゴルへ 再訪･･金井義彦･･･････8P
ブリャンスク日帰り旅行･･ﾁｽﾃｨﾘｰﾅ･ｲﾘｰﾅ･･･10P
＜ロシア留学体験記＞ 小山楓（京都産業大学）･･･11P
キーロフ十字架行進（最終回）･･伏田昌義･･･････13P
イベント 日本アレンスキー協会・コンサート････16P
公開シンポ・ロシア芸術とジャポニズム
ロシア生活不思議体験「タイ人」･････白井秀治･･･18P

JIC では、Ｊクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ロシアの世界文化遺産をシリーズで紹介してきました。第 3 回目は、ペテルブルグ北方・オネガ湖のキジー島に建つ木造教会建築と、ロシアの古都ノヴゴロドと周辺の文化財、タタール共和国カザンのクレムリンと歴史的建築的複合体です。いずれもロシアの歴史と文化の奥深さを感じさせてくれる世界遺産です。

《特集》ロシアの世界遺産(3)

キジー島、古都ノヴゴロド、カザン・クレムリン

キジー・ポゴスト（キジー島の木造教会建築）

登録；1990 年　カレリア共和国、オネガ湖、キジー島
Kizhi Pogost

キジー島は、サンクト・ペテルブルグ北東約 350km のオネガ湖に浮かぶ小さな島。ロシア正教会の美しい木造教会建築群で知られています。1966 年に島全体が特別保存地区に指定され、ロシア各地から、農家や風車、教会などの木造建築が移築されました。現在、ロシア有数の観光地となっています。

キジー（Кижи）というのは、この地の先住民であったカレリア人、ヴェプス人の言葉で「祭祀の場」を意味しています。自然崇拝をしていた当時の人々にとってとても神聖な場所でした。14-15 世紀に、ノブゴロド公国の拡大とともにロシア正教の影響がこの地に及び、先住民が正教に改宗したあとも聖なる地として受け継がれ、教会が建てられるようになったと伝えられています。

プレオブラジェンスカヤ教会（顕栄聖堂）

1714 年建立。高さ 37m、合計 22 の玉ねぎ型ドームを持つ荘厳な木造教会です。釘を 1 本も使わずに、数万枚のヤマナラシ（ポプラ）の木片を組み合わせて作られた玉ねぎ型の丸屋根が、見事な造形美を見せています。天然の木肌は風雨と太陽光にさらされて銀色に変色し、独特の質感と存在感を生み出しています。

ポクロフスカヤ教会（生神女庇護聖堂）と鐘楼

プレオブラジェンスカヤ教会には暖房がなく、夏の短い期間のみ使用されます。そこで、「冬の聖堂」として、暖房設備（ペチカ）を備え、9 つの玉ネギ型ドームをいただくポクロフスカヤ教会が 1764 年に建てられ、さらに、1862 年に八角形の鐘楼が建てられました。この 3 つの木造建築は回廊でつながっていますが、どこから見ても美しく見えるように配置が計算され、絶妙の調和を保っています。

これらの木造建築物は近年老朽化が進み、ユネスコによって緊急修理の必要が指摘されていますが、設計図がなく、鋸とノミとキリだけで建てられた独特の構造であるため、現代の建築技術をもってしても修復が難航しています。現在、内部に入って見学できるのはポクロフスカヤ教会だけで、プレオブラジェンスカヤ教会と鐘楼は外部からしか見ることができません。

ポクロフスカヤ教会と鐘楼

国立建築民俗野外博物館

さらに、キジー島にはカレリア地方をはじめロシア各地から多くの木造建築物が移築されています。ロシアに現存する最古の木造教会である**聖ラーザリ復活教会**、大小さまざまな鐘の演奏が行われる**アルハンゲル・ミハイル教会**のほか、19 世紀から 20 世紀初頭にかけての農民の家、水車小屋、鍛冶屋などが、いくつも立ち並んでいます。

キジー島は長さ 7km、幅 500m の細長い小さな島です。木造建築は島の南部に集中していますが、時間があれば、島の北部も歩いてみるとよいでしょう。こちらにも古い建築物があり、ロシアの農村風景を楽しむことができます。

<キジー島への行き方>

キジー島へは、オネガ湖畔の町ペトロザボーツクから高速船で行きます(約 1 時間)。ペトロザボーツクは、フィンランドと国境を接するロシア・カレリア共和国の首都で、サンクト・ペテルブルグから列車で約 9 時間(モスクワからだと列車で 14 時間半)かかります。

ペトロザボーツク

キジー島観光の窓口となるペトロザボーツクの町も少し紹介しておきます。町の名前の意味は、「ピョートルの(ペトロ)工場(ザボーツク)」。町の歴史はピョートル大帝が 1703 年に製鉄所を建設したことに始まります。人口は約 25 万人です。

町の中心部は、鉄道駅からオネガ湖まで延びる約 2km のレーニン大通りで、ホテルやショッピングセンター、博物館などはすべて町の中心部に集まっています。逆に、中心部以外には木造家屋が多く、ひなびたロシアの地方都市といった風情が広がっています。

オネガ湖畔には彫刻と美しい照明で飾られた遊歩道(**オネガ湖畔通り**)があり、市民の憩いの場となっています。湖畔通りの突き当たりには、キジー島への連絡船ターミナルがあります。

カレリア美術館には、カレリア地方の民族衣装や美しい刺繍、民族叙事詩「カレワラ」をテーマにした作品などが集められています。

古都・ノヴゴロドと周辺の文化財

登録;1992 年　　ノヴゴロド州ノヴゴロド市
Historic Monuments of Novgorod and Surroundings

ノヴゴロドは、名前の意味は「新しい町」ですが、それに反してロシアで最も古い町です。現在の正式名称はヴェールキー・ノヴゴロド(Великий Новгород)＝**大ノヴゴロド**。ロシアの歴史発祥の地として、敬意をこめてそう呼ばれています。

ロシアの年代記によれば、ヴァリャーグ(バイキング)のノルマン人ルーシ族の首長**リューリク**が乱れた国土を治めるためこの地に招かれ、ロシア最初の国家を 862 年に建設したとされます。さらに、リューリクの一族オレーグがノヴゴロドから南下してキエフを占領し(882 年)、ここに古代ロシア＝**キエフ・ルーシ**の基礎が築かれました(リューリク朝)。ノヴゴロドとキエフは、「ヴァリャーグからギリシアへの道」と呼ばれる古代交易路の途上にあり、バルト海からヴォルホフ川を遡り、ドニエプル川を下って黒海に出、コンスタンチノープルに至るバイキングの交易拠点として繁栄しました。

政治の中心は**キエフ大公国**に移りましたが、ノヴゴロドは商業都市として繁栄をつづけ、中世ハンザ同盟の商館が置かれるなど、都市貴族による共和政体をとった自由都市＝**ノヴゴロド公国**へと発展していきました。13 世紀のモンゴル侵攻によって、キエフその他、ロシアの主要都市が「タタールの軛」に苦しめられる中、ノヴゴロドは幸運にも破壊を免れ、独立を保ちました。その後**モスクワ大公国**がロシアを統一するまで、ノヴゴロドはロシアの中心都市の役割を果たすことになります。

ノヴゴロドのソフィア大聖堂

モンゴルの侵攻は免れたものの、ノヴゴロドは、同時期に西から襲来してスラヴ人に「剣による改宗」を迫った北方十字軍(*注 1)の矢面に立つことになります。この時、現れた英雄がノヴゴロド公**アレクサンドル・ネフスキー**(1220-1263 年)です。アレクサンドルは、「ネヴァ河畔の戦い」で、わずかな兵力でスウェーデン軍に大勝し、「氷上の決戦」でドイツ騎士団を打ち破り、勇名をとどろかせました。

ノヴゴロド公国は、1478 年にモスクワ大公イワン 3 世によって征服され、モスクワ大公国に併合されました。以後、ノヴゴロドはロシアの一地方都市として存続し、古都の面影を残しながら今日に至っています。

*注 1 北方十字軍;カトリックのデンマーク王、スウェーデン王、リヴォニア騎士団、ドイツ騎士団によって開始された十字軍。北欧・バルト海沿岸の異教徒に対してカトリックへの改宗を強制するために遠征を繰り返した(12 世紀半～16 世紀)。

前置きが長くなりました。以下、ノヴゴロドの世界遺産を紹介します。

クレムリン

ノヴゴロドの旧市街は、ヴォルホフ川をはさんで半径約 2km の城壁(土塁)に囲まれた中にあります。その中心となるのがクレムリンで、この町の最も古い部分です。いくつもの塔を城壁でつないだクレムリンの周囲は緑地帯の公園になっていますが、城壁の内部もまた公園のようになっており、中にはソフィア大聖堂やロシア 1000 年

記念碑、鐘楼、歴史考古学博物館などがあります。

聖ソフィア大聖堂

現存するロシア最古の石造建築物で、美しい白亜の教会。ノヴゴロド公ウラジーミルがキエフのソフィア大聖堂の再現を願って 1050 年に建立したといわれます。6 つの玉ねぎ型ドームを持ち、白い外壁が高くそびえ立つ巨大な聖堂です。内部の壁面はフレスコ画で埋められていますが、創建当時のものは一部しか残されていません。窓が少ないため内部は薄暗く、光と影の対比がはっきりとして、重厚な雰囲気を醸し出しています。しかも、音響効果は抜群。ここで聞く聖歌の荘厳で透明な響きは心に沁みわたります。

聖堂は、歴代のノヴゴロド公や貴族の墓所としても使われてきました。南西の端にはウラジーミル公とその母の遺体が安置されています。また、西玄関には、1187 年にスウェーデンとの戦いで戦利品として持ちかえった**青銅の扉**がはめ込まれています。聖書物語が刻まれたこの扉は、12 世紀青銅彫刻の傑作と言われています。

ソ連時代には、聖堂は「反宗教博物館」とされて迫害を受けました。また第二次大戦で損傷を受け、ドーム上の十字架はスペイン義勇兵部隊に持ち去られました。1991 年に大聖堂はロシア正教会に返還され、持ち去られた十字架もスペインからもどり、2005 年からの修復工事によって今日の姿によみがえりました。

ロシア 1000 年記念碑

リューリクによる建国から 1000 年を記念して 1862 年に造られた記念碑は、高さ 15.7m、重量 65t の銅像で、クレムリンの中央に鎮座しています。十字架のついた宝珠と基礎部の周りにロシアの歴史を彩った英雄や偉人、芸術家たちの彫像が並んでいます。リューリクをはじめ、アレクサンドル・ネフスキー、ミハイル・ロマノフ皇帝、ピョートル大帝、エカテリーナ 2 世、プーシキン、レールモントフなど計 128 体の彫像が、ロシア 1000 年の歴史を語りかけます。

ヤロスラフ宮廷跡と市場

ヤロスラフ宮廷跡は、クレムリンから橋を渡ってヴォルホフ川を越えた対岸にあります。ウラジーミル公の父、ヤロスラフ賢公の邸宅があったといわれるこの場所では、数世紀にわたって交易市場が開かれ、ノヴゴロドで一番の賑わいを見せました。ここには、かつての市場の名残りであるアーチ状の列柱をはじめ、12～17 世紀に建てら

ノヴゴロドのクレムリン

れた 7 つの教会が残っています。宮廷跡にある教会で一番古いのは、半円ドームが特徴の**聖ニコラス聖堂**(1136 年建立)。そのすぐ北隣には、1207 年建立の**パラケヴァ・ピャトニツア教会**が立っています。

さらに、宮廷跡の東にも古く美しい教会建築が集中しており、**市場の聖ミカエル教会**(1300 年)、**受胎告知教会**(1552 年)、**イリイナ通りのスパサ・プレオブラジェーニヤ教会**(1374 年)、**ズナメンスキー聖堂**(1688 年)、**聖ピリポ教会**(1526 年)、**聖母の御印教会**(17 世紀)ほか、多くの教会が立ち並んでいます。その密度はスズダリやウラジーミルの比ではありません。しかし、これらの教会は発掘や修復途上のものが多く、修復作業の進展とともに順次公開されつつあります。

ズナメンスキー聖堂

ユーリエフ修道院

市内からバスで 20 分ほど離れた郊外にあります。ヤロスラフ賢帝により 1030 年に創立された修道院ですが、ほとんどの建築物は 19 世紀に立て直されたもの。中央に建つ聖ゲオルギー聖堂だけが 12 世紀の建築物です。聖堂内の壁と天井を覆うフレスコ画は非常に美しいのですが、これもほとんどが復元されたものです。

ヴスタラヴリツィ 木造建築博物館

世界遺産ではありませんが、ユーリエフ修道院近くの木造建築博物館も必見です。この地方の伝統的な木造建築を集めた野外博物館で、8 つの木造教会と 14 の民家が集められ、展示されています。

<ノヴゴロドへの行き方>

ノヴゴロドへは、モスクワから夜行列車で約 8 時間。サンクト・ペテルブルグからは 1 日 10 便以上のバスが出ているので(所要 3 時間半)、日帰り旅行も可能です。

カザン・クレムリンの歴史的・建築的複合体

登録;2000 年　タタールスタン共和国カザン市

Historic and Architectural Complex of the Kazan Kremlin

カザンは、タタール共和国の首都。モスクワから東へ 800km、ボルガ川とカザンカ川の合流点に位置する大都市です。今年 8 月に世界水泳選手権大会が開かれたので、覚えている人も多いでしょう。

町の起源は、11 世紀初頭にボルガ・ブルガール人によって建設されたと言われています。「タタール」とは、北アジアのモンゴル高原から東ヨーロッパにかけて広範な地域で活躍したモンゴル系、テュルク系（トルコ系）、ツングース系の様々な民族をさす総称です。ブルガール人もその一派で、西のドナウ川流域に定住したブルガール人はキリスト教を受容してスラブ人と同化し、今日のブルガリア人を形成しました。一方、東のボルガ川流域に定住したブルガール人はイスラム教を受容し、13 世紀にモンゴル人に征服されてこれと同化し、タタール化していきました。

クレムリンのスパスカヤ塔

13 世紀、カザンの町はジョチ・ウルス（キプチャク・ハン国）の支配下にはいり、タタールの諸公国の一つとなります。ジョチ・ウルスの分裂後、カザン・ハン国が形成されると、カザンはその首都となり、ボルガ川の水運を利用した東西交易の中継地として繁栄しました。1552 年、ロシアのイワン 4 世（雷帝）は大軍をもってカザンを包囲し、激戦の末これを陥落させました。カザン・ハン国はロシアの支配下で 18 世紀初めまで存続しますが、以後、カザンは完全にロシア帝国に組み込まれることになりました。

カザン市の人口の半分超はイスラム教徒であるタタール人ですが、一方、ロシア人も 40%ほど住んでいます。カザンは、ロシア文化とイスラム文化が共存する、独特の雰囲気をもった町なのです。

カザン・クレムリン

カザン・クレムリンは、町の中心部を流れるカザンカ川の左岸、なだらかの丘の上に建っています。ボルガ・ブルガール人は、北の国境の要塞として最初のクレムリン（城塞）をここに築きました。15 世紀にカザン・ハン国が成立すると、クレムリン内に宮廷が置かれ、行政府の中心となります。また、クレムリン内にはクル・シャーリフ・モスクがあり、タタール人の聖地ともなっていました。しかし、イワン雷帝のカザン征服（1552 年）によって、町もクレムリンも徹底的に破壊されました。その後、クレムリンは 16 世紀から 17 世紀にかけて再建造営されました。現在、クレムリン内にはタタールスタン共和国大統領府が置かれ、周辺にも行政機関や学術機関が集中し、政治・文化・学術の中心となっています。

クレムリン内には、以下の建造物があります。

ブラゴヴェシェンスキー大聖堂

1562 年に建設されたブラゴヴェシェンスキー大聖堂（生神女福音大聖堂）は、クレムリン内で最古の石造建築物（資材はこの地方特産の砂岩）。5 つの玉ねぎ型ドームが美しくそびえ立っています。ロシア革命後の 1930 年に取り壊されましたが、ソ連崩壊後に再建されました。

スュユンビケ塔

6 層 58m の斜塔で、カザン・クレムリンのランドマーク的存在ですが、建設時期は不明。塔の名前は、カザン・ハン国最後の王女、スュユンビケに由来します。スュユンビケ塔の最下部は、クレムリンへの主要な出入口となっています。

スパスカヤ塔（救世主塔）

16 世紀に建てられたスパースキイ修道院の一部でしたが、修道院はソ連時代に破壊され、この白く美しい塔だけが残されました。

クル・シャーリフ・モスク

イワン雷帝によって破壊されたモスクが再建されたのは 453 年後のこと。2005 年 6 月にヨーロッパ最大級のイスラム教建築としてクル・シャーリフ・モスクは再建されました。

タタールスタン共和国は 1990 年 8 月に主権宣言を行い、ソ連崩壊後はロシア連邦政府と対等な国家関係をめざして厳しい交渉を続けました。そして、1994 年に連邦政府と二国間条約を結び、大幅な自治権を獲得、独自の共和国建設を進めたのです。こうした独自路線の下で、クレムリンの発掘調査が行われ、ボルガ・ブルガールやカザン・ハン国の時代に忠実な復元作業が行われることになり、クル・シャーリフ・モスクやブラゴヴェシェンスキー大聖堂の再建が実現しました。イスラム教とロシア正教徒の共存が、ユネスコ世界遺産登録においても高く評価されました。

今年は、JIC スタッフが例年になく多くロシア各地に出張で出かけました。マトリョーミン演奏ツアーや、シベリア墓参、モスクワ航空ショー、ハルビン合唱コンサートなど、企画旅行もたくさん手配しました。以下は、JIC スタッフによる旅行記です。

《旅行記・シリーズ》

カムチャツカ・アヴァチャ山 登山記

白井　秀治（JIC 東京）

ベースキャンプからのぞむアバチャ火山（2741m）

1990 年まで外国人はもとよりロシア人までも入域が制限され、原潜発射ミサイルや大陸間弾道ミサイルの試射着弾地でもある秘境の極地カムチャツカ。日本の約 1.25 倍の面積におよぶこの巨大なカムチャツカ半島は 300 を超える火山がひしめき合い、「火山の博物館」という異名をもっています。この火山群は半島最高峰クルチェフスカヤ山を含むクルチェフスコイ自然公園、クロノツカヤ山のあるクロノツキー自然保護区、州都からほど近いナルィチェヴォ自然公園の他、2 つの自然公園および 1 つの自然保護区を含む 6 ヶ所がユネスコの世界自然遺産に登録されております。因みに、このカムチャツカ最高峰のクルチェフスカヤ山は、ユーラシア大陸最高峰の活火山でもあり、一般的には標高 4,735mですが、幾度となく噴火を繰り返すことによりその標高は定点ではなく、常に変化しています。

生きている。貴女は生きているんですね！

（ロシア語で山は女性名詞なので「貴女」です）。

今回、この秘境の極地カムチャツカ半島の火山群でも州都ペトロ・パブロフスク・カムチャツキーから最もアクセスが良く 3 つの活火山が隣接するナルィチェヴォ自然公園にあるアヴァチャ火山に「登るぞ！」という企画が立ち上がりました。目的はもちろんJICでもトレッキングツアーを！という野望を抱き、現地視察を兼ね実際に登山をするためです。

そこでわたくし自称登山好きの白井がこの視察登山に名乗りを上げさせていただきました。

行動予定は以下の通りです。

7 月 18 日　成田⇒ペトロ・パブロフスク・カムチャツキー
　　市内ホテル泊

7 月 19 日　ホテル⇒アヴァチャ山ベースキャンプ(以下、B.C と略)。ラクダ山ハイク（足慣らし）、B.C.テント泊

7 月 20 日　B.C.よりアヴァチャ山登頂　B.C.テント泊

7 月 21 日　B.C. ⇒市内。ホテル視察。市内ホテル泊

7 月 22 日　市内観光後、帰国

日程を上記のように書くと、なんてことはありません。すでに他の旅行社で似たような登頂ツアーがございます。

海外登山は事前の調査と準備が肝心

ところが、準備が以外と大変でした！

何が大変かと言うと…、JIC の企画では B.C での宿泊を他社さんには無い「テント泊」で設けたところです。海外登山でテントですね。テントですからもちろん食料・燃料・水、その他必要な装備は自己責任。全て自前でございます。ここまでで「ピンッ！」とくる方は登山経験豊富です。それは海外登山での燃料手配です。旅客機では登山用具のガスストーブ本体は持ち込みできますが、燃料の持ち込みは禁止されています。ガスカートリッジやガソリンなどは現地調達です。それ故、事前に現地でカートリッジが販売されているかどうかを調べなければなりません。

私が愛用しているガスストーブのメーカーは「プリムス」です。メーカー側はオリジナル仕様を推奨。万が一事故が起きても責任はとれないとのこと。当たり前の話です。一方、液体燃料で愛用しているストーブはMSR です。これは海外登山では強い味方ですよね。どんな世界の僻地へ行っても必ず灯油は手に入りますから…。

液体燃料の灯油はガソリンスタンドで簡単に手に入るので問題無しですが、当のペトロ・パグロフスク・カムチャツキーでは、私が調べたところ中国製の謎めいたカートリッジの販売はあるようですが、プリムス製品を扱っているショップを見つけることができませんでした…。専用カートリッジを入手するのは意外と困難かもしれないのです。後は、現地に入って、ガイドさんに訊いてみるしかありません。

この他、水の確保、登山道・テント場の状態、アクシデントにおける緊急避難経路など、登山に必要な情報は、ほとんど全て現地旅行社の担当者とやり取りしたので問題無し。残るは、二泊三日の夏山登山に必要な行動食・予備食の調達です。これは日本で購入しました（登頂できた場合に自分へのご褒美としてパイナップルとみかんの缶詰も！）。

後は登山当日の天候だけです。

初めて行くところは、国内もそうですが心躍りますよね。

いざ、カムチャツカへ

成田空港を出発して 3 時間後、搭乗機はカムチャツカ半島上空。窓から見えるのは残雪の山々と曲がりくねる数々の河川。その間に見える湿原の緑と青は日本上空では見ることができない光景でした。

パスポートコントロールを無事通過し、小さい空港でしたから迎えのハイヤー運転手とのミーティングもラクラク。難なく、初日のホテルにチェックイン。なんとスムーズに事が運ばれたのでしょう！早速、熱いシャワーを浴び、ホテルのレストランに着座。

そう言えば、わたくし、久方ぶりの海外。現地通貨を両替していないことを思い出しました…。これは！ここで怯んではいけません！何となく財布の中をチェックしているふりをしていると名刺サイズのプラスチックの神様がちらりと顔を見せております。なんて心強い味方。一瞬の冷汗は心地よい温もりへと変わりました。改めてテーブル上にあるメニューを見てみると…。やはり！残念！両替していないのでメニューに記載される価格を円計算できません。非現実的で恐ろしい値段の羅列にしか見えなくなってしまった私は堅く拳を握りながらそそくさとレストランを後に自室へと戻りました。

ガイドと筆者（右）

気を取り直すまで自室で数分掛かりましたが、一食抜くくらいなんてことありません！それよりも翌日はいよいよ山岳ガイドさんと顔合わせです。気持ちを入れ換え、気合いを込めてベッドに潜りこみました。

窓の外には火山が2つ！

翌日、目覚めるとなんということでしょう！部屋の窓からは火山が 2 つ見えるではありませんか！しかもその火山の間には、ラクダ山も！！！　ネット検索で予習してきた貧しい知識でも見分けが付きます！

「よっしゃぁ！あそこに登るんだ！」

ザックの装備をもう一度点検：テント、マット、寝袋（念のためマイナス 10℃仕様）、ストーブ 2 台、クッカー、ヘッドライト、ツェルト、ソーラー充電器、予備電池、ストック、ハイドレーション、救急セット、レイン、防寒具、グローブ、食料、行動食、予備食。一つ一つをチェックして声を上げながら確認をとりました。

さて、いよいよホテルチェックアウト。山岳ガイドさんとロビーでミーティングです。ところが、しばらくの間ホテルロビーで待っていましが一向に山男風の人が現れません（個人的なロシア人山岳ガイドのイメージとしては、真っ赤に日焼けして体格が果てしなくゴッツイ、ありえないくらいの巨人を連想しておりました）。日本人トレッキンググループが続々と出発していくのを横目に少々不安になっていると、奥の方に座っている細身で爽やかな青年と目が合いました。「もしや？このお方？え？イメージと全然違うぞ？」と心の中で疑問符を並べていると、

市内のスポーツショップ

やはり。これまた素晴らしく爽やかな笑顔で私に近づき「MR.SHIRAI？」と声を掛けられました。ロシア人山岳ガイドのイメージは木端微塵に粉砕。めちゃくちゃ好印象の爽やか青年に導かれ待機中の送迎車へと案内されました。私が知るアヴァチャ火山 B.C.への送迎車は兵員輸送車のような特殊車両でしたが、ここでも予想は覆りました。送迎車はなんと、三菱デリカ - スペースギア（廃盤）の 8 インチリフトアップ車にグッドリッチ MT の大型タイヤ、さらにシュノーケル

写真（上）B.C.への道、（下）B.C.の宿泊施設とレストラン

付きではありませんか！四駆好きの私としては非常に興味がそそられるお車です。明らかに、日本人オフローダーの手で改造されたと思われるこの車。非常にドキドキしてしまいました。

さてドライバーさんとも挨拶を交わし（ドライバーさんの方が全然山岳ガイド風）、いざ B.C.へ出発！事前に、燃料を

購入したいと現地の旅行会社に伝えていたので、もちろんガイドさんにも連絡が届いていました。近くのスタンドで軽油を 1 リットル購入。ガスストーブのカートリッジを購入するためにスポーツショップにも立ち寄りました。予想はしていましたがプリムス純正のカートリッジは販売されておらず手に入れたのは、漢字の羅列がプリントされた怪しげなカートリッジ一個。ただブタン・イソブタンとラテン文字で記載されていたので間違いないですね。本体と結合するためのスクリュー部分も至って普通。実際に結合できるかは分かりませんが購入しました。現地で不具合があれば、即座に使用中止にすれば良いだけのことです。次に現金。ルーブルがまったくなかったので、予定外の銀行立ち寄りをお願いして準備 OK。

街を後に幹線道路へと車は移動して行きます。

見える景色はと言うと、やはり日本ではまず目にすることができない光景です。一見、北アルプス近くを車で走っているような感じですが、どの方向を見ても火山がどこかに目にはいります。言ってみれば、どの方向を見ても富士山が見えるようなものです。なかなか爽快な景色でした。

ダートを走り、ベースキャンプへ

さて、車はいよいよ B.C.へと続くダート走行に変わります。その昔、四駆でトライアルやクロスカントリーを楽しんでいた私としてはドライバーさんの運転技術を注目してしまいます。流石は慣れていらっしゃいました。涸れた川を（砂地を）走行するため、ダートコースに入り、ちょっとした広場でドラバーさんはタイヤの空気圧を減にしていました。ロックセクションはともかく砂地ではタイヤの抵抗を増やすために空気圧を減らすのは基本中の基本。まさにセオリー通り。内心「ふっ。わかってるじゃん」などと超上から目線で見ておりましたが、もちろんそのようなことは言葉では発しません。おとなしく助手席に座っておりました。と思っているところ！！！見えてきました！B.C.の建物です！目測 1500mです！とうとうやってきました。はるばると。行ってみたいなカムチャツカ半島。来てしまいましたカムチャツカ。目の前の B.C. その向こうには、左にコリャーク火山、ラクダ山を挟んでアヴァチャ火山です。壮大な景色！富士山二つ！しかも元気な活火山！！感動でした。

車は B.C.駐車場に到着、早速チェックイン手続きをして、その間荷物を降ろしてくれていたドライバーさんにもお礼を言い、ホテルで先行していた 20 名以上の日本人ツアー客がミーティングをしている脇で一気に取りかかりましたテント設営＆食事の準備。「何で、あなたテントなの？」と言わんばかりの冷たい視線を感じておりましたが、「山にきたんだからテントでしょ！」と私は背中で答えました。

早速、愛用 MSR ガソリンストーブ（燃料は軽油）でお湯を沸かし温かいコーヒー、そしてチキンラーメン。至福の時を満喫。たまらないですねこの瞬間。　　― つづく―

《旅行記》

ロシアからモンゴルへ、再訪

―2015 年 7 月 29 日　ウラジオストク

金井　義彦（JIC 東京）

ウラジオストクまでの添乗業務と、現地会社スタッフに会うという任務があり、正午に任務完了した。これを『ミッション 1』とするならば、『ミッション 2』がその『1』完了直後から始まり、帰国、出社、そして報告することでそれは完了する。だからモンゴル、ウランバートルに向かう列車の中、コンパートメントの同居人たちが楽しくトランプのダウトをやっている最中も、揺れる列車のベッドの上でこのレポートを書いたりしているわけである。外は緑の山、背の低い木、時々見える家屋や道路。牛。線路の継ぎ目の音と時々トランプをシャッフルする音。たいした変化ではないのかもしれないが、そんな景色や音や雰囲気が楽しいので列車旅では退屈と思ったことがない。『ミッション 2』は、ウラジオストク～バイカル湖～ウラン・ウデ～ウランバートルの視察研修旅なのだ。

ホテル『アクフェス西洋』はユニークな形の建物で、ウラジオストクの中心地から少し離れた場所にある。水回りや設備が古めではあるが、「ソ連ぽい」と受け入れれば気持ちが楽になり、今後の旅もいろいろ文句をつけたり不快に思う事が少なくなるかもしれない。町のトイレが汚かったり、道路に突然穴が開いてたりすることにも驚かなくなれる。

ホテルから中心地までの交通手段はバスか電車かタクシー。幸いにも電車がちょうど来る時間なので駅を目指して歩く。僕は方向音痴がヒドいので、道行く人にしょっちゅう尋ねて道を確認していく。とりあえず「こんにちは」が言えれば教えてもらえる。『フタラヤ・レーチカ』という駅までは歩いて 10 分ほど。バスターミナルと市場が隣接している。バスターミナルで行き先を見ていると面白い。ウラジオストクからハバロフスクまでバスで行けるのだ。市場は小さい商店がいくつも集まっているタイプで野菜や服、靴など売ら

※1　フタラヤ・レーチカ駅

れており、買い物に来る人も多くて賑わっている。人と人が直接やりとりするのでスーパーマーケットとはひと味違う楽しさがある。

フタラヤ・レーチカ駅は空港エクスプレス列車ができたため新しい。窓口でチケットを買うと、「急いで行け。急げ急げ」と言われる。そんなにぎりぎりと思っていなかったが、駅舎を一旦 3 階まで上ってプラットホームまで下りるのは思ったより時間がかかった。海の景色を見ながら終点まで 15 分。ウラジオストクは 4 年ぶりでさぞかし懐かしいと思うだろうと思っていたが、「懐かしい」ではなく、「初めて来た」でもなく、「どこだ？」という感じがぴったり合っている気がする。町は車が多いもののなんとなく整然としていて華やかで、『ZARA』があったり、カフェがあったり。例えるなら、4 年ぶりに友人に再会して「久しぶりだね！」と笑顔で言葉を交わしたかったのに、相手の外見が変わってしまい「誰だっけ？」となった感じだ。そして友人は中身までも変わってしまったのか、昨日 S7 航空で成田からウラジオストク空港に着地した時、乗客の拍手が一切なくさみしかった事を思い出した。

※2　スポーツ湾沿い

とは言うものの、知らない町を訪れたと思えば楽しい。夏のシーズンはビーチで水遊びや日光浴をしている人々がちらほらいて噴水が気持ち好く踊っている。クワスを飲んだりアイスクリームを食べたりして海からの風を浴びる。ちょっとしたカフェでスイーツとアイスカフェラテなんて感じのお茶をしたりして「初めまして」のウラジオストクを歩いた。そう、吊り橋が架かり、空港エクスプレスができ、『HYATT』の看板ホテルが建っている。今「ウラジオストク」と言えばこういう町を指すのだ。

イルクーツクまでのフライトのため、空港に行かなければならない。駅に向かう。そうか。大事な人に挨拶をするのを忘れていた。4 年前と同じようにレーニンは指をさして立っている。

「御無沙汰しております」。

そう、いつ来てもレーニンはここにこういう格好でいたのだ。10 年前に初めてロシアに来てシベリア鉄道に乗り込んだ時も、富山から客船ルーシ号で着いた時も、鳥取から DBS フェリーで着いた時も。そしてキャベツのピロシキやサリャンカやモルスは相変わらずおいしく、僕はやっぱりロシアにいる。

新しい交通機関、エクスプレスは時刻表通りに出発し、空港まで簡単に移動ができた。町中でもいくつかみつけたダイドーの自動販売機がある新しい空港。くり返しになるが、今「ウラジオストク空港」と言えばこういう空港を指すのだ。

ウラジオストク空港を発ち、飛行機はイルクーツクに到着した。

「パチパチパチ」。

機内で拍手がちらほら。僕はうれしくなって一緒に手を叩く。少し遅れたが「久しぶり！」と、ウラジオストクに再会した。

（つづく）

＝＝＝以下【JIC ブログ】より抜粋＝＝＝

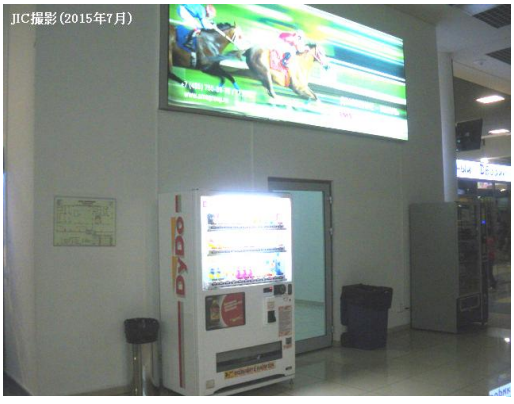
※1　フタラヤ・レーチカ

とりあえず「こんにちは」と「ありがとう」は現地の言葉で憶えて何度も使って憶えていくようにしましょう。ロシア語の「ズドラーストヴィチェ（こんにちは）」は憶えにくい「こんにちは」のひとつだと思います。最近の私の経験ではカンボジアの「チョムリアップスォー（こんにちは）」が手強く、何度もメモを見てくり返すようでした。通じなくてもヘコタレないでハッキリ、大きな声でメゲずにくり返しましょう。まぁ、どこでも「ハロー」で良いとは思うのですが、、、現地にいて少しでも現地側に身を傾けた精神姿勢になりたい人は実践しているでしょう。

「こんにちは」と声を掛けるとたいていの人は足を止めてこちらの話を聞いてくれようとしてくれます。でも「必ず」ではないので、ここでもヘコタレずに何人もアタックしてみましょう。目的は「フタラヤ・レーチカ」駅に行くことです。あとは話せなくても「フタラヤ・レーチカ？」とハッキリ言って、指をあっち方向に指したりこっち方向に指したりして相手の答えを促しましょう。きっとロシア語でいろいろ説明してくれますが、結局わからないので雰囲気である方向を指してみて、相手が「ダー（yes）」と言う方向に歩いていきましょう。「ありがとう」も忘れずに言いましょう。「お友達になりたい」など、目的がほかにもある場合には英語（他の言語）で通じるかを試みても良いかもしれません。

※2　スポーツ湾沿い

ウラジオストクの海は、夏に行ってみたい所でした。泳いでいる人は少なかったですがみなさん水着で日光浴を楽しんでいます。屋台も出ておりアイスクリームやアルコールなども売られています。驚いたのはプライベートビーチエリアのような区域があり、入場料を徴収していることです。歩くと汗びっしょりになります。気温は 30℃を超えていたでしょう。海沿いには



※3　ウラジオストク空港のジュース自動販売

魚市場があり、そこにビアホールのような広い場所があります。海を見ながら飲んだり食べたり。夜は盛り上がることでしょう。

※3　ウラジオストク空港のジュース自動販売機

ウラジオストクの空港にはいくつか日本の自動販売機が設置されており、中の商品が日本製のせいかロシアのそれより少し料金が高めに設定されています。それでもロシア人は結構頻繁に利用しているようです。ほんの短時間の観察結果を報告すると、どうやら「炭酸系」が彼らの好みのようです。コーヒー系は全く売れていないようでした。

そばで観察していると、ロシア人男性（推定 38 歳）が炭酸系飲料を買おうと 100 ルーブル投入しました。目的の商品は 95 ルーブル。しかし自動販売機の該当商品ボタンは光らないのです。他の商品ボタンは光っているものもあるのに。

普段日本で自動販売機に慣れている私たちにはすぐにピンときます。「釣銭切れ」らしき部分にロシア文字のランプが点灯している。なるほど。これは釣銭 5 ルーブルが切れているんだな、と。私は彼に「5 ルーブルあるか？」と聞いて、「ある」と言うので「じゃ、さらに 5 ルーブル入れろ」と言いました。彼は意味がわからず「もう 100 ルーブル入れてるんだよ」と。その通りです。95 ルーブルには足りているのです。「機械に 5 ルーブルが無い。」と説明したのですが、彼は納得がいかないまま 5 ルーブル追加投入。目的の商品のボタンが光りました。ボタンを押す。おつり 10 ルーブル。彼はジュースを取り出し「スパシーバ」と言いました。

《旅行記》

ブリャンスクへの日帰り旅行

イリーナ・チスティリーナ（JIC モスクワ）

ブリャンスク（Брянск）はモスクワの南西 380 キロ。ベラルーシ（西）とウクライナ（南）に国境を接するブリャンスク州の州都です。ブリャンスクはロシアの年代記で 12 世紀に登場する古い町ですが、今日では赤軍パルチザンの強い活動で有名です。第二次世界大戦で、ドイツ軍は開戦直後の 1941 年 6 月 10 日にブリャンスクを占領しました。これに抵抗して、ブリャンスクの森林では 6 万人以上のロシア人がパルチザン部隊として活動しました。そして、1943 年 9 月 17 日、赤軍はブリャンスクを解放しました。1944 年 7 月、ブリャンスク州が新設されて、ブリャンスクはその州都となりました。ブリャンスクは「戦争栄光都市」（city of military glory）なのです。9 月 17 日は「ブリャンスクの日」として毎年祝典が行われています。

モスクワからブリャンスクへは、日帰り旅行が可能です。モスクワ発 6 時 20 分の急行列車“STRIZH”に乗ると、10 時 35 分にブリャンスクへ到着します。帰りは 18 時 55 分発の急行列車で 23 時 15 分モスクワ着。ほぼ丸 1 日ブリャンスクで過ごすことができます。

ブリャンスクの駅から市内中心部まではバスを利用します（片道 12RUB＝約 25 円）。

市内の主な名所としては、戦争栄光の石柱、不死の塚（Курган Бессмертия）、パルチザンスカヤ・ポリャナ記念館（Мемориальный комплекс Партизанская поляна）など、第二次世界大戦に関係する名所があります。戦争栄光の石柱は不死の塚の出入口の前に立てられています。不死の塚というのは、丘の上に建てられた高さ 12 メートルのメモリアル碑です。このメモリアルの

特徴はどこかから見たら、星が見えることです。丘の上に立つと、眼下に美しい景色が広がっています。

パルチザンスカヤ・ポリャナ記念館内には、ソ連軍の戦車、飛行機、灯明、戦争博物館などがあります（博物館の入場料は 60RUB）。

木製彫刻の公園もあります。これは、ブリャンスクの有名な作家、ワレンチン・ディナブルグスキーのユニークな木彫コレクションを集めた公園です。このコレクションのおかげで、公園は世界の 400 の珍しい公園を収録した「世界の公園」という本で紹介されています。

ブリャンスクは、ロシア南西部の交通の要衝にあるため、13 世紀にはタタールの侵攻を受け、その後もリトアニアやポーランド、ロシアによる争奪を何度も経験しました。17 世紀以降、交易都市として発展し、「スヴェンスカヤの市」という、西ロシア最大の定期市が開かれていました。19 世紀から冶金業、繊維業などの工業化が進み、今日ではロシア鉄鋼業・金属工業の中心地となっています。ブリャンスクは鉄道車両や機関車の生産拠点として有名です。

【ロシア留学体験記】その２

急激に伸びた聞き取る力 日本文化紹介にも取組む

京都産業大学・小山楓（モスクワ大学留学中）

ロシア・モスクワに来て早５ヶ月。留学もとうとう折り返し点に来ました。モスクワの夏は終わりを迎え、残暑という言葉を会話の中で出す間もなく、短くて美しい黄金の秋を迎えました。この５ヶ月間はとても長く、ひたすら自分と向き合って、まるで「自分探しの旅」をしているような感覚でした。

秋色に染まるモスクワ大学構内

【大学生活】

7、8 月のモスクワ大学の授業はサマースクールという形で行われ普段の授業コマ数よりも１つ減ります。サマースクールには１ヶ月の短期留学組も多く、トルコ、イタリア、スペインなど様々な国の学生がロシア語を学ぶために参加しています。一気に学生が増えるため食堂は常に満席だったり、１クラス 10 名程度で授業を受けたりと、てんやわんやしますが多様な価値観を持った学生と話すことができ非常に楽しく大学生活を過ごしました。

留学前から持っていたその国の人達に対するイメージがだいたい合っていたり、違っていたり、驚くことも多かったです。例えばイタリア人やスペイン人はお国柄なのか明るく社交的でお祭り好きな人ばかりでよく飲みに行っていたのですが、お店で別のイタリア人留学生グループと会うことがしばしばあり、「日本人だったらこんなことはないだろうな」と思いました。

大学での授業は３ヶ月目からリスニング力が急激に伸びたため、内容が聞き取れるようになり、相手の話の全体像を掴むことができるようになりました。これはロシア語しか聞くことができない環境に身を置き、ひたすら聞いていたからこそ身についた力なので、まったく留学のおかげです。

また実際の会話で使用される単語や会話表現なども、ロシア人と会話することでしか学べない言葉が多く、留学に来た意味がありました。先生方はモスクワ大学を卒業された方ばかりで、言語学の専門家なので、とても丁寧でかつ「かゆいところに手が届く」ような教え方をされます。周りの留学生たちも、ロシア語を学び、将来その語学力を生かそうと考えている学生ばかりなので、学ぶ環境としては非常に良く、刺激的です。

【インターンシップ】

現在、ジェーアイシー旅行センターのモスクワ事務所でインターンシップをさせていただいているのですが、旅行の仕事は学ぶことが多く、日々勉強になります。特に、事務所の責任者であるイリーナさんの仕事に対する姿勢を見ると考えさられます。

また自分の仕事がロシアへ来る、あるいは日本へ渡航するお客様にとって、少しでも役立っていると思うとやりがいを感じたりします。

【日本文化の紹介活動】

少しでも日本とロシアの架け橋となることをしたいという思いから、在露日本人と日本語を学ぶロシア人を繋ぐイベントの運営にも携わっています。イベントは月に１度開催され、毎回 100 名ほどの参加者がお互いの国の文化について語り合います。自分たちが企画したゲームなどを通して参加者が交流を深める様子を見ると、しっかり準備してイベントを開催して良かったと思うとともに、もっと参加者の満足度を上げたいと思い、改善点を探し、次のイベントにつなげるよう努力していま

す。また、当地で開催されたメディカルツーリズム展覧会で、日本ブースのスタッフとしてお手伝いをさせていただきました。当日は日本製の体組計の使い方の説明を

し、実際に参加者に使ってもらいましたが、人だかりができるほど人気で、日本の技術力の高さを実感しました。ロシアで治療が難しい病気を罹っている方々が日本の病院の説明を熱心に聞く姿を見て、日本の医療・技術力の高さを感じました。参加者のほとんどがロシア人なので、ロシア語での対応だったのですが、通じないことも多々あり、自分のロシア語力のなさを痛感しました。ちょうど留学の「中だるみ」の時期だったので、気を引き締める良い機会になりました。

【今後の目標】

今後の目標は

① ロシア語力をビジネスレベルまで引き上げる
② 日本の文化をロシアに伝える活動をする
③ 日本・ロシアの企業を訪問し帰国後の進路を考える

以上 3 つの目標を達成するために、残り 5 ヶ月の留学生活を自分なりに過ごしていきたいと思います。

まだ折り返し地点ですが、このロシアという日本からみたら不思議な国での留学生活は、私の人生を変える大きな出来事になりました。この国に留学できて心から良かったと思います。若いうちに日本を離れ海外で生活する経験は一生涯のものです。日本という国を外から見ることで自分の母国を愛することができますし、自分と関わりのなかった異国の地を愛することもできます。この記事を読んで下さった皆さんにも、是非そういった経験を積んで欲しいです。

JIC ロシアセミナー

毎年恒例の JIC ロシアセミナーを 11 月 28 日に東京で開催します。中澤英彦先生の講演テーマは、そのものズバリ、「留学が変えた人生」です。ロシア語を勉強している方、留学を考えている方、是非多数ご参加ください。

講演；「留学」が変えた人生
講師；中澤英彦先生（東京外国語大学名誉教授）
日時；15 年 11 月 28 日（土）13:30～17:00
講演会；13:30～15:00
ロシア留学相談会；15:15～17:00
会場；新宿オークタワー1F 会議室
（地下鉄丸ノ内線「西新宿」徒歩 2 分）
参加費；無料
申込・問合先；TEL 03-3355-7294
e-mail= jictokyo@jic-web.co.jp
主催；ＪＩＣ 国際親善交流センター

「悪魔の飽食」合唱コンサート ハルビン公演ツアーに 270 人

旧日本軍の戦争犯罪をあばき、過去の反省に立って未来の平和を呼びかける「悪魔の飽食」合唱団のコンサートが、731 部隊が置かれていた中国黒竜江省ハルビン市で 9 月 24 日に開かれた。参加したのは、作曲家で指揮者の池辺晋一郎氏をはじめ総勢 270 人の参加団。JIC は 2 年前にロシア公演の手伝いをした縁で、今回の中国公演でも旅行手配をさせていただいた。

ハルビン市平房地区にあった 731 部隊本部は敗戦と同時に日本軍が破壊して証拠隠滅をはかったが、破壊しきれなかった施設も多く残されている。それらが歴史遺跡として発掘され、人体実験や細菌兵器開発などの戦争犯罪資料とともに「731 罪証陳列館」として保存されている。今回の公演は、同陳列館の新館が 8 月に完成オープンした記念に中国側の招待で実現した。

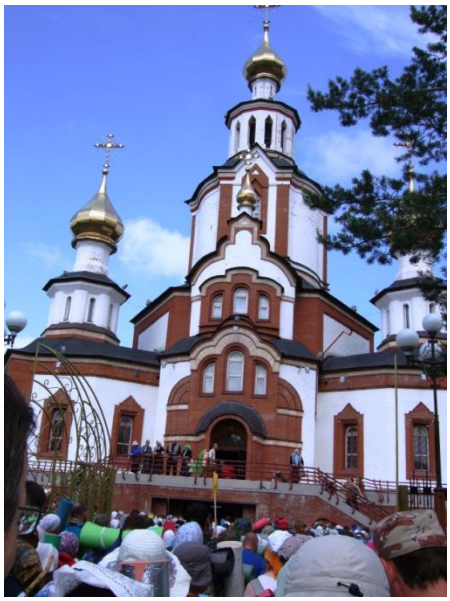
日中の友好と平和を祈り記念植樹

参加団は、9 月 22 日ハルビン着。23 日 731 陳列館新館と発掘遺跡を見学し、記念植樹の後、夕方からリハーサル。24 日午前市内見学、午後コンサート準備と公演、25 日帰国というハードスケジュールだったが、精力的に日程をこなし、約 700 人の観衆の前で素晴らしい歌声を響かせた。また、神戸の和太鼓グループの演奏も好評を博した。戦後 70 年の記念の年にふさわしいハルビン公演ツアーのお手伝いをさせていただき、JIC としてもとても感謝している。（伏田）

キーロフ十字架行進（最終回）

ロシアの心、ロシアの自然を体感した5日間

伏田　昌義



6日目　**6月8日　キーロフ市内**

十字架行進は、いよいよ最終日の午後に入った。この日 3 回目の休憩地で昼食をとった後、ちょうど 12 時頃に広い幹線道路からキーロフ市内に向かう分岐点に到着した。すでにこの日の行程の半分以上を歩いている。断続的に降っていた小雨がやみ、空が少し明るくなってきた。

市内に伸びる道路が右に緩やかにカーブする先に、アパートや工場の建物が入り混じったキーロフの街並みが広がっている。これから市内に入り、いくつかの教会をめぐってから、出発点の聖トリフォン修道院をめざすのだが、市内入口にたどりついたという安堵感から、もうすぐにでも行進が終わるような錯覚にとらわれる。

しかし、ここからがまだ長かった。分岐点から、次の休憩地となる市内のノヴォムチェニキ教会まで約 2 時間、さらにもう一つ別の教会まで市内の通りを道いっぱいに広がりつつ巡り歩いて、終点の聖トリフォン修道院に到着したのは夕方の 5 時前だった。

分岐点から市内へ、雨上がりの道を歩く。

ソ連時代は「閉鎖都市」だった工業都市キーロフ

キーロフ（Киров）は、ボルガ川に注ぐカマ川の支流、ヴャートカ川の左岸に位置している。最初の名前はフルイノフ（Хлынов）といい、1181 年に交易商人たちによって町が開かれた。昔のロシアの物流は河川を利用した水運で支えられており、フルイノフは毛皮交易の中継地、農産物の集積地として栄えた。1780 年に町の名前がヴャートカ（Вятка）に変わり、1934 年にキーロフと改名された。

18 世紀から 19 世紀のヴャートカは政治囚の流刑地でもあった。19 世紀後半の革命思想家、アレクサンドル・ゲルツィン（Александр Герцен）がこの地に流されていた。19 世紀末にシベリア鉄道が開通し、駅が置かれて交通の要衝となったヴャートカには近代的な工場が建ち始める。第二次大戦中にドイツ軍の攻撃を避けるためにロシア西部から多くの軍需工場が疎開して来たために、キーロフは重化学工業都市として急速に発展することになった。キーロフで製造された T-34 戦車は、ソ連がドイツ軍を撃退し勝利をおさめる決定的な原動力となった。キーロフにはまた、航空機産業（スホーイ）の部品工場があり、化学ではバイオ工業が盛んだ。こうした事情により、ソ連時代のキーロフは長らく「閉鎖都市」とされ、外国人の立入が禁止されていた。

現在のキーロフ市の人口は約 46 万人。航空機部品や自動車製造、電子工業、バイオ化学などの工業都市であると同時に、家具生産や工芸品づくりでもよく知られている。近郊のディムコヴォ村で作られる土人形や笛などの玩具は、今でも「ディムコヴォ人形」、「ヴャートカ人形」の名前で親しまれている。

余談ながら、第二次世界大戦はロシアの都市建設に大きな影響を及ぼした。ドイツ軍の電撃作戦によってソ連西部地域はあっという間に制圧され、モスクワ、レニングラードの二大都市が陥落寸前という苦境に追い詰められたため、これら諸都市の工場設備や文化施設は東部のウラル地域や西シベリアへと、疎開のため大挙移された。モスクワ陥落に備えて首都機能の大半がクイビシェフ（現サマーラ）に一時移されて「臨時首都」となったのをはじめ、レニングラードのキーロフ・バレエ劇場とワガノワ・バレエ学校はペルミへ、エルミタージュ美術館の収蔵品はスベルドロフスク（現エカテリンブルグ）へと疎開した。ゴーリキー（現ニジニ・ノブゴロド）、チェリャビンスク、カザン、ウファ、オムスク、クラスノヤルスクと

いった都市にも戦車、ロケット砲、火器・弾薬など軍需工場が次々と移設され、戦後、これら諸都市は自動車、航空機、機械製造などを中心とする重工業都市として発展することになった。

スターリン大粛清の引き金となったキーロフ暗殺

セルゲイ・キーロフは、ロシア革命に参加し、スターリンの懐刀として辣腕をふるったソ連時代初期の革命家であり政治家だ。キーロフは 1923 年に共産党中央委員に選出され、26 年にジノヴィエフらスターリン反対派が勢力をもっていたレニングラードの党第一書記に就任した。スターリンの部下として、反対派の排除や農業の集団化に力をふるった。30 年代にはスターリンと並ぶ有力政治家と目されるようになったが、1934 年 11 月に反対派党員によって殺害された。スターリンはこの暗殺事件を、政敵追い落とし、共産党内反対派への大粛清の口実として利用した。事件直後、レニングラードの共産党指導者の大多数が逮捕され、処刑された。1930 年代後半にソ連全土を吹き荒れた大粛清の嵐によって、数知れない政治家、軍人、共産党員が処刑され、数百万の無実の人々が収容所に送られて過酷な強制労働を強いられた。

スターリン大粛清の引き金となったこの事件は、キーロフの人気を妬んだスターリンが、反対派の古参ボリシェビキを一掃し、国内の大粛清を進めるために、暗殺を指示したのではないかという見方が、長らくソ連研究者の間で定説のようになっていた。しかし、1991 年のソ連崩壊後に公開された歴史文書ではそのような事実を裏付ける資料は発見されておらず、今では偶発的な殺人事件を奇貨として、スターリンが独裁権力を確立するために、これを最大限に利用したものと考えられている。

ともあれ、このような背景のもとに、セルゲイ・キーロフの故郷に近いヴャートカ市は、1934 年 12 月に彼の名前を記念して、キーロフ市と改名された。ソ連崩壊後、市の名前をもとのヴャートカにもどそうという提案もあったが、市民の支持が得られず、そのままになっている。

ソ連時代に名前が変えられた都市は多い。レニングラード（旧名：サンクトペテルブルグ）、スベルドロフスク（旧名：エカテリンブルグ）、ゴーリキー（旧名；ニジニ・ノブゴロド）、クイビシェフ（旧名；サマーラ）、キーロフ（旧名；ヴャートカ）、プーシキン（旧名；ツァールスコエ・セロー）、ボルゴグラード（旧名；ツァリーツイン、スターリングラード）などだ。

ソ連崩壊後、かなりの都市が旧名にもどされたが、元に戻さずそのままとなっている都市も結構多い。キーロフ市民が、町の名前を旧名ヴャートカに戻すことに同意しなかったのは、この町がソ連時代に大きく発展し、キーロフの名前がそれだけ人々に慣れ親しまれているということなのだろう。ソ連崩壊直後は、社会主義時代のすべてを否定する論調が優勢だったが、しかし、それも含めて自分たちの歴史なのだと受けとめて、ソ連時代の否定面と肯定面を冷静に評価する常識的な考え方もまた健在なのだ。

広い通りを道いっぱいに広がって歩く

さて、キーロフ十字架行進はもう最終局面を迎えている。市内のノヴォムチェニキ教会に到着したのは午後 2 時前。教会の周りの庭には参加者が思い思いに荷物にもたれて座っている。教会の中から神父たちの野太い祈り声が朗々と響き出ていた。雨はすっかり上がり、空には晴れ間がのぞいている。私たちも草が生い茂った庭の隅に小さな空き場所を見つけてシートを敷いて座り込み、疲れた足をしばし休ませた。

20 分もすると教会から十字架を掲げた神父たちが出てきて、先頭集団を率いて歩き出した。ジーマ氏がここからはできるだけ先頭近くについて歩こうと指示を出し、私たちも 5 分ほどして出発。キーロフ中心部にもどってきた安堵からか、あるいはこれが慣例となっているのか、広い通りを道いっぱいに広がって人々が歩いている。まるでフランスデモのような賑やかさだ。デモと違うのは、どの人も大きなリュックを背負って、かなりくたびれた格好をしていること。しかし、疲れてはいるが、どの顔にも笑顔がこぼれている。私たちは三々五々、しゃべったり、アイスクリームをかじったりしながら、ゆっくりと大通りを歩いた。

（写真）行進が終わりに近づいた。どの顔にも笑顔。

突然後ろから、黄色と黒の布地に双頭の鷲をあしらったツアーリ旗を掲げて、ツアーリ時代の国歌を歌い、ツアーリ賛歌を声高に唱和しながら、十数人の若者たちが迫ってき

た。皆、軍人のような迷彩服を身につけている。行進最終盤の、開放的ではあるがかなり疲れた雰囲気の中では、異常に元気のよい集団だ。

ジーマ氏が素早く合図を出して道端に寄り、「ツアーリ党集団」をやり過ごす。「連中の参加は自由だが、その主張には同意できない」。セルゲイ氏が強い口調で吐き捨てるように言う。「キーロフ行進の公式ホームページによれば、参加者が守るべき『行進のルール』がいつくか決められています。正教の教えを集約したアカフェストにもとづいて祈るのが望ましい。各個人がその独自の祈りを行うのは構わないが、正教の教えと関係ない主張を集団的に宣伝するのはよくありません。」と同行のジーマ君が解説してくれる。ロシア正教の復活とともに、保守主義、原理主義の傾向を強めるグループも確実に増大してきているようだ。

復活したロシア正教と愛国主義

ドミトリー・トレーニン著『ロシア新戦略』によれば、ソ連崩壊前の「1989年、人口のおよそ75%が無神論者であると自認し、正教徒であるというのは20%未満であった。20年後、その比率は逆転した」という。

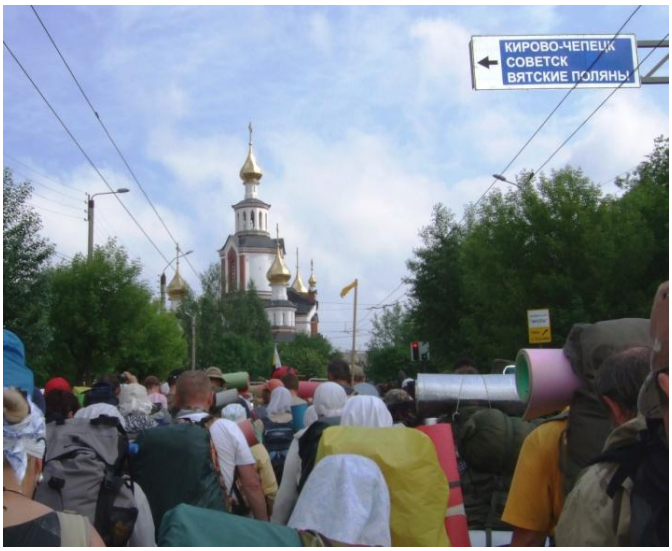
ソ連時代の末期、1988 年のロシア正教受洗千年祭を機に、ゴルバチョフは共産党による過去の宗教弾圧を謝罪し、ロシア正教会の社会的、精神的役割を再評価して、「政教和解」を確認した。新宗教法が制定され、信教の自由とそれまで禁止されていた教会の広範な社会活動が法的に認められることになった。

ソ連崩壊とその後の社会的経済的大混乱の中でロシア人は深い喪失感を味わい、共産主義イデオロギーに代わる精神的よりどころを求めて、伝統的な宗教へと回帰した。こうしてロシア正教会はロシア社会で急速に復活を遂げた。

ソ連崩壊後ほぼ四半世紀が過ぎた今日、ロシアの国民統合の精神的支柱となっているのは、一つは、ロシア正教に体現される信仰の力と民族的文化的伝統、もう一つはナポレオン戦争、第二次大戦（独ソ戦）など度重なる外敵の侵攻を苦難の末退けた勝利の記憶＝愛国主義だと言える。この二本の柱を基礎にして、ロシアは、かつてアメリカと互角に対抗した超大国とまではいかなくとも、国際社会でそれなりの重きをもった「大国」として認められるべく復活しようともがいている。

伝統社会への回帰は、ロシア正教の教えに忠実であろうとする保守主義、原理主義の傾向を強めざるを得ない。愛国主義は偏狭な民族主義と表裏一体の危険性をはらんでいる。だが、もう一方で、市場経済とともにロシアに受け入れられた民主主義的な価値観、世俗的な自由を守ろうとするリベラリズムの潮流も確かにロシアに根付いている。さらに言えば、ソ連時代にも途切れることなく引き継がれたロシアの国民性～その文化的精神的素養の豊かさ、自然と人間をこよなく愛する生き方、互助の精神に溢れた生活文化などが、ロシア社会の健全性を保っていると思う。キーロフ行進への参加は、このようなロシア社会の変化と人々の生活意識を身近に体感する機会となった。

個人的にも、これまで 30 年以上もロシアとつき合っていながら、十分に知らなかったロシア人の素の姿や生活に触れ、厳しくも優しいロシアの自然を体験することができたことは大きな収穫になった。



市内のいくつかの教会をめぐり歩く

＊　　＊　　＊

市内のいくつかの教会をハシゴして、終点の聖トリフォン修道院に到着したのは夕方の 5 時 10 分前だった。（この日の歩行；8 時間、33km）。

聖トリフォン修道院では、さらに一時間ほど最後の儀式が行われた。修道院の庭を埋めて座り込んだ人々の上に、マイクを通して祈りの言葉が降り注ぐ。人々は頭を垂れてじっと聞き入り、時々唱和しながら胸の前で十字を切る。祈りの内容はよくわからないが、聞き入る人々が深く内省し、静穏な空気に包まれているのはよく分かる。私もしばし 5 日間にわたった行進を反芻し、静かな余韻にひたった。

こうしてキーロフ十字架行進はすべて終了した。

私たちは、このあとキーロフ市内から車で 1 時間程離れたジーマ氏のダーチャ（別荘）に招かれ、快適なバーニャで汗を流し、たっぷり 1 日休息をとってから翌日の夜行列車でモスクワにもどった。ダーチャは、ヴャートカ川とベリカヤ川の合流地点、私たちがキーロフ行進で歩いたメジャーニ村のすぐ近くにあり、私たちはベリカヤ川で泳いだり、広大な草っぱらでバイク走に興じたりして、ダーチャ生活を楽しんだ。ジーマ氏のダーチャは、まさに別荘と言ってよい素晴らしさで、ロシアのお金持ちの日ごろの暮らしぶりを十分に伺わせるものだったが、その後日談はまた別の機会に譲りたいと思う。（了）

《イベント情報》 コンサート

日本アレンスキー協会第 1 回東京例会

グラズノフ生誕150年 タネーエフ没後100年 記念演奏会

高橋健一郎（日本アレンスキー協会副会長・札幌大学教授）

ロシア音楽と聞いて、どういう作曲家が思い浮かぶでしょうか。おそらく、まずはチャイコフスキーやラフマニノフ、そして音楽に詳しい方であれば、プロコフィエフやショスタコーヴィチあたりも浮かぶことでしょう。もしアレンスキーやタネーエフ、グラズノフ、リャードフなどの名前が挙がったとすれば、かなりのマニアに違いありません。

今最後に名前を挙げた人たちはいずれも 1850 年代後半から 60 年代前半に生まれたロシアの作曲家で、世代で言えば、ちょうどチャイコフスキー（1840 年生まれ）とラフマニノフ（1873 年生まれ）の中間の世代に当たります。この世代の作曲家は音楽史ではこれまでずっと不当に低い評価を受け、せいぜい教育者として音楽史の文献の中でたまに名前を見かけるだけで、作曲家としては半ば忘れられた存在でした。しかし、その作品は実際には非常に洗練された作曲技法に彩られ、美しいリリシズムに溢れ、まさにロマンティシズムの極限のようで、実に素晴らしいのです。

そんな作曲家達の埋もれた作品を発掘し、研究や演奏を通して世に広めていこうと、2009 年に「日本アレンスキー協会」が設立されました。アレンスキーという名前をつけていますが、実際にはアレンスキーだけでなく、同世代のタネーエフ、グラズノフ、リャードフ、カリンニコフ、カトワールその他幅広く取り上げています。設立以来、年に 2 回の例会（主にレクチャーコンサート形式）や通常の演奏会など、かなり精力的に行ってまいりました。本部は札幌にありますが、現在、北海道だけでなく、本州、四国、九州など全国各地に 110 名を超える会員を擁します。

今年 2015 年はグラズノフの生誕 150 年、タネーエフの没後 100 年に当たります。グラズノフはペテルブルグ音楽院の院長、タネーエフはモスクワ音楽院の院長を務め、二人ともロシア音楽史上では大教育者としてその名を残しています。しかし、その作品に関してはまだそれほど知られているとは言えません。この二人の記念イヤーにあたって、当協会は二人の作品に焦点を当てた例会を企画しました。声楽、ピアノ独奏、室内楽と様々なジャンルの曲をお聞きいただく演奏会です。中にはサクソフォーンのための曲も含まれ、非常に盛りだくさんで、ユニークな充実した演奏会になることでしょう。当協会の演奏活動はこれまでほぼ札幌に限定されていましたが、今回この大事な記念イヤーにあたり、首都圏にも進出し、第 1 回東京例会を開催いたします。皆様のご来場を心からお待ちしております。

（写真）
上、グラズノフ
下、タネーエフ

日本アレンスキー協会　第 1 回東京例会

グラズノフ生誕 150 年＆タネーエフ没後 100 年記念演奏会

【プログラム】

グラズノフ：
《スペインの歌》、《宴の歌》（Sop 松井亜樹・Pf 高橋健一郎）
《瞑想曲》Op. 32 （Vn 瀬川光子・Pf 堀田未歩）
《2 つの小品》より「メロディー」Op. 20-1（Vc フェイギン・Pf 堀田）
《ノクターン》Op.37 （Pf 加藤露弥）
《演奏会用大ワルツ》Op.41 （Pf 岩本きより）
《3 つの小品》Op.25 （Pf 宮谷理香）
《サクソフォーン四重奏曲》（Sax ガチカル）
タネーエフ：
《私の心は泉》、《接吻》Op. 33-3（Sop 松井・Pf 高橋）
《アンダンテ・センプリーチェ》（Pf 加藤）
《ピアノ四重奏曲 ホ長調》Op. 20 （Vn 瀬川・Va 松実健太・Vc フェイギン・Pf 川染雅嗣）

【日時】2015 年 11 月 8 日（日） 15：00 開演（14：30 開場）
【会場】ラ・サーラ・スカラ（昭和音楽大学北校舎内）
住所；川崎市麻生区万福寺 1－16－6
【入場料】2,500 円（一般）2,000 円（会員）／全席自由
【主催】日本アレンスキー協会
【後援】昭和音楽大学、札幌大学、麻生区文化協会、一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）

《イベント情報》 公開シンポジウム

ロシア芸術とジャポニズム

19 世紀末～20 世紀初頭のヨーロッパでは、日本を始めとする東洋の芸術文化が大流行します。欧米の芸術家は自分達の作品に、東洋的なモチーフをこぞって取り入れました。ゴッホやマネなどの有名な作品に、日本の扇や着物が描かれているのを見たことがある人もいるでしょう。こうした現象は、ロシアでも例外ではありませんでした。フランスやイギリスなど西欧からもたらされる情報に加えて、1896 年、サンクトペテルブルクで日本美術展覧会が開かれると、大きな反響を呼びました。影響を受けたのは画家達のみならず、音楽や劇場の世界でも、日本をテーマにしたオペラやバレエが上演されました。当時、川上貞奴や花子という日本人舞踊家が、ロシアや西欧で公演を行なったことも見逃せません。しかし当初は、西欧の芸術様式に、日本や東洋のモチーフを鏤めるといった安易な手法が取られ、すぐに新しい表現スタイルが生まれたとは言えませんでした。この段階を、単なる日本趣味（japonaiserie）や東洋趣味と呼び、その後の、異国のモチーフを消化・昇華して生まれた新しい様式―ジャポニズム(Japonisme)やジャンル・ヌーヴォー(genre nouveau)と区別することができます。本シンポジウムでは、美術・舞踊・音楽などの分野で、東洋の影響を受けてこの新しい様式が生まれたかどうかを検証します。ストラヴィンスキーやルリエーといった作曲家達による、日本の和歌を主題にした珍しい作品などもご紹介します。

日本人に扮して踊るアンナ・パヴロワ（1923 年）

また、ロシアとジャポニズムだけに限定せず、幅広く西欧と東洋芸術文化についても考えます。東洋の芸術文化は、19 世紀以降、西欧に大きな影響をもたらしましたが、本国・本地の東洋でも再受容されました。ここでも新しい様式が生まれたのでしょうか？

19 世紀から 20 世紀の変わり目に、日本やイスラム文化と並んで西欧で人気があったのが、英国の植民地だったインドです。長大な叙事詩『マハーバーラタ』は、その後も東西の芸術家を魅了し、様々な作品が生み出されました。20 世紀後半では、英国人演出家ピーター・ブルックの舞台作品が有名です。21 世紀の日本では、いつも意欲的で面白い作品を制作する SPAC-静岡県舞台芸術センターが、鬼才宮城聰氏の演出で『マハーバーラタ』を上演し、国内外で大成功を収めています。SPAC の独創的な『マハーバーラタ』は大評判を呼び、2014 年には世界的に有名なアヴィニヨン演劇祭、そして本 2015 年には、モスクワのチェーホフ演劇祭で上演されました。本シンポジウムでは、SPAC 制作部の中野三希子さんに、日本人演出による『マハーバーラタ』という作品と、海外での受容について、写真や映像を交え語って頂きます。専門的な知識のある方以外にもお話を楽しんで頂けると思います。是非、聴きにいらして下さい。

『マハーバーラタ』の舞台写真（提供： SPAC ／撮影：三浦興一）

公開シンポジウム「ロシア芸術とジャポニズム」

【日時】12 月 4 日（金）17:00–19:00
【場所】東京大学法文2号館Ⅱ大教室（変更の可能性あり）
司会：沼野充義（東京大学教授）
コメンテータ：伊東一郎（早稲田大学教授）
報告者：
平野恵美子（東京大学研究員）
「20 世紀初頭西欧芸術のジャンル・ヌーヴォー」
高橋健一郎（札幌大学教授）
「ロシアのモダニズム音楽とジャポニズム」（ストラヴィンスキーとルリエーの和歌歌曲の詩学）
中野三希子（SPAC–静岡県舞台芸術センター 制作部）
「宮城聰演出『マハーバーラタ』ﾁｪｰﾎﾌ演劇祭 2015 参加報告」
【入場料】無料（予約不要）
＊ 関心のある一般の方の御来聴を歓迎致します。
【問合先】東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室
ホームページ: http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~slav/
Tel:03-5841-3847 担当：平野
（水、金の 12-17 時内におかけ下さい）

【ロシア生活 不思議体験】

『タイ人』

白井　秀治（JIC 東京）

20 年前、僕はロシアに留学していた。

大学寮の同じフロアにタイ人の留学生がいた。
ロシアでは全く小柄な僕（170cm）よりもはるかに背が低かった。
自己紹介をした後、「お互いアジア人だから仲良くしよう」、「困ったことがあったら助け合おう」と必要以上な笑顔を見せる好印象な人物だった。

彼はあまり授業には足を運ばずタイ人同士でいつもたむろしていたが、週末に開かれる多国籍留学生のヴェチェリンカ（パーティ）には毎回タイ料理を自前で作り奉仕していた。それは非常に美味しかった。

そんなある日、彼にちょっとした用事があり尋ねに行った。
彼は黒いタンクトップに短パン姿で料理の最中だった。
いつもの眩しい笑顔で僕を部屋に通してくれた。

「食事は済んだ？」
「いや。これから作る」
「食べる？」
「喜んで」
という会話がまるで BGM のように自然と流れた。

彼のタンクトップ姿はアスリートっぽく非常に美しかったが、ただ黒地に黄色の文字で縦に平・禾・口と三文字が描かれていたのは少々気持ちが悪かった。しばらくしてからその文字列を『平和』と読むことにした。

「何かスポーツでもやってるの？」僕は訊いた。
「ムエタイ」
「マジか！？」
「これでも国内チャンプだった」。彼は自慢げに拳を高らかに握って見せた。
「そりゃ強いな！」
「でかいロシア人にからまれても平気だ」。ますます得意げになった。

「食事をしたら、ムエタイの型を見せてくれない？」
「今、見せようか？食後だと体が重くなる」
「本当か！見せて！」と僕は言った。

調理中の電気コンロを止めて、フロア奥にある毎週末ヴェチェリンカが行われる広場へ向かった。彼は首をクルクルまわしながら僕の前を歩いた。

広場に着くやいなやあまり見たことのないストレッチを始めること数分。
「じゃ、ちょっと離れてね」。今回は全く不要な笑顔だった。ストレッチ後もできれば締まった表情のままで言ってもらいたかった。その方がカッコ良い。
「おぉ。そうだね」。僕は拍手をしながら言った。

「シュッ、シュッ、シュッ」と声を発しながらの彼の足技や、繰り出されるパンチの早さは想像を絶していた。
アスリートのスピードは本当に違う。
30 秒くらい動いた彼は一体何発のパンチと足技を出したのだろう？

「あんまり身体が動かなくなったなぁ」
彼は笑顔で言った。
「本当か？早すぎて見えなかったぞ」
「これじゃ、もう絶対に勝てない」
恐るべしムエタイチャンプ。本物だった。

彼と再び部屋に戻り、料理をご馳走になった。
食事をしながら、日本の格闘技のすごさも教わった。彼曰く、『柔道か合気道が世界最強』とのことだった。一生懸命説明してくれたが僕には分からなかった。
食事とムエタイのパフォーマンスを見せてくれた彼にお礼を言って、僕は自室へ戻り「何か格闘技をやっていれば良かったな」と生まれて初めて思った。

その後も彼の生活はあまり変わらず、大学にはあまり通っていないようだった。

数ヶ月が経ったある日の夜中。
彼の隣人のタイ人が僕の部屋のドアをノックした。
話を聞くと、ムエタイ君がここ数日帰って来ないということが判明。
隣人君が情報収集しているとのこと。
もしかしたら、事故か事件に巻き込まれたのか…。
同じフロア学生全員の頭を過った。

それから 2 週間位経ってからだったと思う。
腕とお腹に包帯を巻いたムエタイ君が寮に帰ってきた。
彼の姿をみた多国籍学生チーム皆が安堵した。

フロアの殆どの学生が彼の話を聞いた。

ある日、ムエタイ君が銀行で生活費 500 ドルを両替したところ、フーリガン 5 人に囲まれた。
金銭目的の強盗だったようだ。
初めはフーリガン達を無視して、足早にメトロへと移動した彼だったが、執拗に絡むフーリガンの一人が彼の首元を腕で絞めつけた。危険を感じたムエタイ君は反射的に反撃してしまったらしい。身体が勝手に動いたとのこと。
状況は一変。
フーリガンは本気で替えたばかりの 500 ドル分のルーブル紙幣が入ったバックを奪おうとムエタイ君に襲いかかった。彼はいよいよ本気でフーリガンを撃退。
渾身のムエタイ技で四人を撃退したが、残り一人に刃物で腕と脇腹を刺されマットに沈んだ（何も見せなくてもよいのに、彼はシャツを脱ぎ包帯の上から刺された部分を指でなぞった）。その光景を見ていた周囲の通行人は刺されてからの彼をようやく助けてくれた。救急車に運ばれたムエタイ君は病院で治療を受けようやく寮に帰ってこれたと話した。

皆が心配そうに彼の話を聞き入っていたが、やはり不要な笑顔で話さなくても良かった。

ただ、彼はかなりのショックを受けていた。
それは 500 ドルが盗まれたからではなく、5 人目のフーリガンが刃物を利用したことに納得がいかないようだった。拳なら勝てたとは流石に言わなかったが。包帯が巻かれた腕から見える拳には力が入っていた。

翌週、ムエタイ君は帰国した。

あれから 20 年以上経つ。
彼は何をしているのだろう。
時々思い出す。

ロシア文化フェスティバル 2015 IN JAPAN

＊文化の秋にふさわしく、多彩なプログラムが予定されています。

モスクワ・カルテット　コンサート
10 月 30 日(金) 東京
10 月 31 日(土) マスタークラス
11 月 2 日(月) 東京･紀尾井ホール
11 月 6 日(金) 静岡音楽館 AOI

アレクセイ・ペトロフ指揮
ロシア国立モスクワアカデミー合唱団　コンサート
11 月 26 日(木) 千葉県東総文化会館小ホール
11 月 28 日(土) 兵庫県稲美町立文化会館コスモホール
11 月 29 日(日) 大阪・ザ・シンフォニーホール
12 月 1 日(火) 東京カテドラル関口教会聖マリア大聖堂
12 月 4 日(金) 日経ホール ＊
12 月 17 日(木)～18 日(金)サンタクルーズ東京A ＊
12 月 18 日(金)～19 日(土)サンタクルーズ東京B ＊
12 月 20 日(日)～21 日(月)サンタクルーズ名古屋 ＊
12 月 22 日(火)～23 日(水)サンタクルーズ神戸 ＊
問合せ先;アルス東京
http://www.arstokyo.co.jp/general/2015/moscow/

ファルフ・ルジマトフ＆藤間蘭黄＆岩田守弘
奇跡のコラボ 「信長 NOBUNAGA」
10 月 11 日(日)開演 18:00
10 月 12 日(月･祝)開演 14:00／19:00(2 回公演)
申し込み:ロシアン・アーツ TEL:03-5919-1051

レオニード・アニシモフ演出
「天と地といのちの架け橋 古事記」公演
古事記上巻より、「天地のはじめ」「国生み」「神生み」「黄泉の国」「天の岩谷戸」を描く
東京ノーヴィ･レパートリーシアター
11 月 18 日(水)18:30 開演 梅若能楽学院会館
問合せ:東京ノーヴィ･レパートリーシアター
TEL 03-5453-4945
ロシアン・アーツ TEL 03-5919-1051

ゴレンシュテイン指揮 東京交響楽団 S･カスプロフ(ピアノ)
12 月 12 日(土) ミューザ川崎シンフォニーホール
12 月 13 日(日) サントリーホール
ムソルグスキー/R･コルサコフ:交響詩「禿山の一夜」
ラフマニノフ:パガニーニの主題による狂詩曲作品 43 他
問合せ:東京交響楽団チケットセンター 044-520-1511

クリスマス/アヴェ・マリア(ペテルブルグ室内合奏団)
12 月 5 日(土)13:00 東京オペラシティ コンサートホール
12 月 6 日(日)11:30 東京オペラシティ コンサートホール

12 月 8 日（火）18:30 栃木県総合文化センター
12 月 10 日（木） 伊吹薬草の里文化センター
12 月 11 日（金） 愛荘町立会館ハーティーセンター秦荘
12 月 12 日（土）14:00 ザ・シンフォニーホール
12 月 13 日（日）15:30 東京オペラシティ コンサートホール
12 月 15 日（火）19:00 京葉銀行文化プラザ音楽ホール
12 月 17 日（木）19:00 茅ヶ崎市民文化会館
12 月 18 日（金）19:00 ウェスタ川越
12 月 19 日（土）11:30／15:00 東京オペラシティ コンサートホール
12 月 20 日（日）14:00 日立システムズホール仙台
12 月 22 日（火）19:00 オリンパスホール八王子
12 月 23 日（水・祝）11:30／15:00 横浜みなとみらいホール
12 月 24 日（木）13:00 東京芸術劇場コンサートホール
12 月 24 日（木）19:00 町田市民ホール
12 月 25 日（金）13:00 東京オペラシティコンサートホール
問合せ：光藍社 http://www.koransha.com/

クロージング・コンサート～国立サンクトペテルブルグアカデミーバレエ 公演（ヤコブソン）

12 月 12 日 （土） 14:00　多治見市文化会館
12 月 13 日 （日） 14:00　長野県伊那文化会館
12 月 15 日 （火） 18:30　京都劇場
12 月 16 日 （水） 18:30　ＮＨＫ大阪ホール
12 月 18 日 （金） 19:00　黒部市国際文化センター
12 月 19 日 （土） 14:00　東京国際フォーラム
12 月 20 日 （日） 14:00　同上
12 月 22 日 （火） 18:30　福島県文化センター
12 月 23 日 （祝） 14:00　めぐろパーシモンホール
12 月 24 日 （木） 18:30　オリンパスホール八王子
問合せ ： 光藍社 http://www.koransha.com/

クリスマス・スペシャルクラシックスメサイア、第九＆アヴェ・マリア ミハイロフスキー劇場管弦楽団

ヘンデル ハレルヤ・コーラス　シューベルト アヴェ・マリア
ヴェルディ 凱旋行進曲　ベートーヴェン 歓喜の歌 ほか
12 月 23 日（祝）14:00 東京国際フォーラム（A）
12 月 24 日（木）19:00 東京芸術劇場
問合せ：光藍社 http://www.koransha.com/

ベートーヴェン第九＆運命 ミハイロフスキー劇場管弦楽団

ベートーヴェン 交響曲第5番「運命」
ベートーヴェン 交響曲第9番「合唱付き」
12 月 27 日（日）14:00 横浜みなとみらいホール
12 月 29 日（火）14:00 東京オペラシティ
12 月 30 日（水）14:00 東京オペラシティ
問合せ：光藍社 http://www.koransha.com/

→ 詳細は、文化フェスティバル日本組織委員会にお問合わせください（☎ 03-5919-1051）

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

27 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 27 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,000 人以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、自分ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学4月生・募集中

締切間近です
今すぐお申込みを!

期間：2016年4月1日より10ヶ月

締切: 2016年1月15日(金)

モスクワ国立大学 846,000 円（授業料 10 ヶ月）
ｻﾝｸﾄ･ﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞ国立大学 772,000 円(授業料 10 ヶ月)
ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ極東連邦大学　388,000 円（授業料 10 ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金及び取得手数料などがかかります。

◆JIC ロシア留学デスク◆
ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。
お気軽にお越しください。＊要、事前予約
東京事務所　平日 9:30-18:00　03-3355-7294
大阪デスク　平日 9:30-16:00　06-6944-2341

◇◆編集後記◆◇

▼台風、大雨、洪水と今夏の天候はすこぶる不順でしたが、JIC の旅行事業は何とか昨年並みを維持し、多くのお客様をロシアに送り出し、またロシアから日本にお客様を迎え入れました▼今号では、ロシアの世界遺産紹介とともに、スタッフの旅行記を掲載しました。いずれも今後の旅行企画に生かしていくための情報収集ですが、読者の皆さんからもユニークな旅行体験、他の人にも勧めたい旅行企画など、是非お寄せください▼旅行業は平和な環境の下でのみ発展することができます。ウクライナとシリア・中東の戦火が一日も早く止み、ロシアとアメリカ、ヨーロッパの関係が好転することを祈ります。（F）